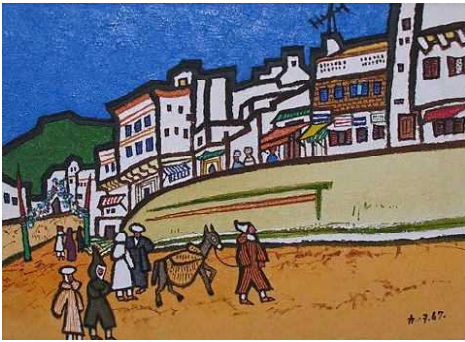


2019年 か ぜ ひ か

風光れ

人権のたより 第14号 6月17日発行

三重県立津東高等学校



かんばやし

上林 暁（1902 - 1980 / 享年77）の短編小説集で、「聖ヨハネ病院にて」を紹介します。

この上林暁という作家を記憶している人もいるでしょう。そう、今年のセンター試験国語の小説に出ていました。「花の精」（『星を撒いた街』）という小説でした。病気の妻を気遣う主人公の内面をどう読み取るかが大きなポイントとなるって国語の教師なのでつい言ってしまいます。

「聖ヨハネ病院にて」は1946（昭和21）年作です。重度の精神病を患い入院している妻を泊まり込みで看病する夫の話です。実際に作者の妻の繁子は1939年に発病して、何度か転院した後1946年5月に38歳で亡くなっています。この作品を読むと、妻が入院するまで、主人公の「僕」はそれほど妻のことをあまり気にかけてもいないで、また、妻が入院してからは、眼も不自由で、自分の始末もままならず、汚物で衣服を汚す妻に嫌気がさしています。また、何でもかんでも口に入れてしまう（「僕」の弁当まで）妻と口論となります。妻が「だってひもじいんですもの」という言葉にむっとする夫。一方で、そうした妻のことを小説のネタにして、妻が亡くなったら書くことがなくなることを心配している打算的な自分の姿勢を批判しています。次の一文を載せておきます。

「ある晩、夕食を食べていると、電灯がふっと消えた。僕は、一物も見えない暗闇の中に座って、箸を取り、井を抱え、皿の大根をはさみながら、暫くそうして食事を続けた。蠟燭もわざとつけなかった。日の光も電灯も射さない妻の世界を実地に経験してみるつもりだった。それは恐ろしい世界であった。僕はたちまち頭がのぼせ上がり、胸の動悸が激しく打ち、思ってもぞつとしてくるのであった。僕はすぐ蠟燭をつけた。一瞬にして僕は救われたが、そんな救いのない妻の世界が、それだけ強く僕の頭に浮かんできた。なんすれぞ、罵詈雑言を浴びせ、腹を立てるとは？僕は自分の罪の深さに、心が乱れた。」

「僕」はある日、病院で行われたミサに出席し、もっと妻にやさしくしてあげようと思うのです。（以上）

是非、読んでみてください。

私たちの中で、障がい者と一緒にいることが気詰まりと感じていませんか？

「言ってはいけないことを言ったらどうしよう」と恐れていませんか？障がい者にとって重要なことは、私たちがその人を尊重して、障がいにとらわれずにその人を見ることだと思います。間違った推測や型にはまった考えをせずに、気軽に話しかけてみませんか。

